



ルノテオ・生徒会編

<http://luno.noor.jp>



星月学園の中等部と高等部仕切る生徒会は、校舎から少し離れた、同じ敷地内の学生会館の中にある。

学生会館は、レンガ造りの小ぶりな二階建ての建物で、以前は大学の研究室の倉庫として使われていたらしい。

建物入口の扉は既に開いている。生徒会室は、会館の二階奥だ。レンは、扉の中へと足を踏み入れた。

「えっと……こっちかな……」

階段を上がりリノリウムの廊下を歩いていくと、やがて生徒会室の古びた扉の前にたどり着いた。

レンは、おもむろにその扉をノックする。

「どうぞ」

扉を開けて現れたのは、学年章から高等部と思われる、色素の薄い少年だ。前髪を目が隠れるまで伸ばし、白いジャケットを着て胸元には白い羽根を刺している。高等部の学生にしては、さほど背は高くなかった。

「失礼します」

レンはそう言って、部屋の中に入った。

「やっと来たね。君が来るのをずっと待っていたよ。そこのソファーに座って」

少年はレンに、ソファーに座るよう促した。

テーブルを挟んだ向かいにあるウィングバックチェアには、眼鏡の男が長い足を組んで座っていた。彼も白いジャケットを着て、胸に白い羽根をつけている。彼も少年と同じ、高等部の学生のようなだった。眼鏡の奥の鋭い眼には威圧感がある。

この人、ちょっと怖そうだな……。

レンがそう思っていると、先ほどの色素の薄い少年がしゃべり始めた。

「僕は書記の臼井。何故、君はうちの制服を着ていないんだい？」

臼井は、レンにそう聞いてきた。目の前の眼鏡の男は黙ったままだ。

「あの……今日、生徒会室に呼ばれたのってそのことですか？」

そう言うと、臼井は小さく頭(かぶり)を振った。

「違うよ、今日は、君から会長に自己紹介をしてもらおうと思ってね」

「はあ……」

会長って……この偉そうにしている眼鏡の人かな？

「僕は、中等部二年の卯月レンです」

「君、その人は会長じゃないよ」

「え？」

「やあ、諸君、待たせてしまってすまない」

遅れて、赤毛で長身の学生が生徒会室に入ってくる。

彼もまた、白いジャケットに胸には白い羽根を刺していた。どうやら生徒会の役員は、みんなこの格好が指定のようだ。

「君が中等部二年の卯月レン君だね。噂通りかわいいね」

赤毛の学生はレンのそばまで来ると、レンの両手を自分の両手でギュッと握りしめた。

「僕がこの星月学園生徒会長の赤井リョウだよ」

わあ、この人、なんて整った顔をしているんだろう……と、思わずレンは赤井に見惚れてしまった。

「初めまして。君みたいなかわいい子がこの学園に転校してくれて嬉しいよ」

「ゴホン」

先ほどの眼鏡の男が咳払いをする。

赤井は、小さく肩をすくめて見せた。

「紺野はね、いつも僕の振るまいが会長らしくないって怒るのさ。だったら副会長なんてやめて、自分が会長をやればいいのにね。君もそう思うだろ？」

「は、はあ……」

「君は、うちの制服を着ていないんだね？」

レンが答えられないでいると、赤井は臼井とまったく同じ質問をした。

「あの……今日ここに僕が呼ばれたのって制服の件ですか？」

「ああ、すまない。勘違いさせてしまったみたいだ。今日君をここに呼んだのは、注意をするためではないよ。まあ、座って」

じゃあ何故……？

促されて再びソファに座ると、臼井が紅茶を運んできた。

「よかったら、紅茶を飲んでいってくれたまえ。最高級の茶葉とカップを用意してあるんだよ。ゆっくりしていくといい」

そう言いながら、赤井もレンの隣に座った。しかも、かなり近い。

「あの……それで、僕がここに呼ばれたわけは何ですか？」

「そうだった、君は転校生だから知らないんだね。紺野、説明してやって」

紺野は足を組んだまま、おもむろに答えた。

「この星月学園の生徒会では、各学年から代表を一人決め、集まってもらっている。そして、そのメンバーでこの生徒会室で開かれるサロンに参加してもらっている」

レンは臼井に出された紅茶を飲む……少し渋いなと感じた。

「サロン……ですか？」

レンの問いには赤井が答えた。

「そうなんだ。これはわが星月学園が設立されたところからの伝統なんだけど、各学年の模範になるような優秀な生徒にね、サロンのメンバーになってもらっているんだよ」

「そんなのもう既に学級委員とかいるじゃないですか。彼らで充分なんじゃないですか？ 何故、僕を？」

「学級委員は、ただの人気投票だからね。それとは別の基準で特別な生徒を選考させてもらっている」

「……」

「選考基準は、成績だけじゃない。普段の生活態度や性格、本当は内緒だけど容姿も基準の一つに含まれる。サロンのメンバーに選ばれることは、星月学園の生徒の憧れであり目標でもあるんだ。みんなそのために勉強やクラブ活動にも熱心になるし、身なりなんかにも気を使うようになる……何にもまして学園生活に張りが出るだろう？」

「フラタニティーとかソロリティーみたいなものですか？」

「良く知ってるね！ この学園では、シュテルナーと呼んでいるよ。君はそのシュテルナーの候補に選ばれたんだ」

「シュテルナー……」

レンは、確認するようにその言葉をつぶやいた。

「サロンは意見交換の場でもあるからね。そこで君達から忌憚のない意見を聞かせて欲しいんだ。例えば、何故君がこの学園の制服ではなく、転校前の制服を着ているのか……とかね」

「これは……だって、ここの制服、ダサイじゃないですか？ ブレザーなんて大人になったらいくらかでも着れますよね？ 僕は、少年が少年である一瞬しかないその時を無駄にしないように過ごしているんです」

「なるほど、つまり……」

「美少年と言えば、セーラー服でしょう！」

「……アハハ、そうか、君のこと気に入ったよ。週に二回、サロンがあるから是非来てくれたまえ」

赤井は実に機嫌よく笑うと、笑顔のままレンにそう告げた。

レンは、自分の教室に戻ろうと中庭を歩いていた。

「これって、もしかして……これこそ僕が求めていた世界じゃないのかな……」

「卯月レン」

突然誰かに背後から呼び止められ、レンはその場で振り返った。

「はあ……榊か。本当、君もお約束だよな」

榊は、お約束通り後ろに子分を二人従えていた。

「なぜ、おまえがサロンのメンバーに選ばれるんだ!? あれはただの意見交換の場というだけじゃない。シュテルナーに選ばれれば、成績や進学にも関係してくるし、何よりも大学も含めた学校内全ての生徒に注目される。それを……転校生のくせに」

「そんなの知らないよ。それに転校生の何が悪いんだよ？ 僕は、編入試験にはちゃんと受かってるし、学費だってきちんと納めてる」

「それを言うなら僕のパパなんか寄付金、君らの数倍この学校に支払ってるんだぞ！」

レンは、思わず肩をすくめてため息をついた。

「はあ、そんなんだから選ばれなかったんじゃない？ そんなに理由が知りたいなら、僕に聞かないで会長ご本人に聞けばいいだろう」

「そ、それは……」

「確かにそう言われればそうだね、榊君」

と、子分 A が榊に言う。

榊は、言い訳をするようにボソボソと口の中であつばやいた。

「か、会長はすばらしい人だ、学年首席なのはもちろん、フェンシングの全国大会で優勝してるんだぞ。校内だけじゃなくよその学校の生徒からも人気もあるし……僕達なんて相手にしてもらえない」

「なんだ、ちゃんとわかってるんじゃない、相手にしてもらえないって。じゃあね、僕、忙しいから」

レンは、榊達にそう言うと、颯爽とその場を去って行った。

そんなことがあった翌週、月曜日の朝礼。

定番の校長のあいさつが終わった後、会長が壇上に上がる。

先ほどの校長の演説の時は、あまり興味を示さず勝手におしゃべりを始めている生徒もいた。

しかし赤井が壇上に立つと、生徒達は途端に静かになり、彼の声に耳を傾ける。

「諸君！ 来週は生徒総会だ。生徒が自由に意見を言える貴重な機会なので、みんな参加してくれたまえ」

ああやって見るとあの会長さん、なかなかかっこいいなあ。昨日の気さくな雰囲気とはずいぶん違う、まるで別人みたいだ……。

レンはそう思いながら壇上の赤井を見つめる。

赤井は、輝かしいオーラを放っていて、まるで舞台上に上がった俳優かスターか何かのようだった。

突然会長はレンの方に顔を向け、レンと眼が合うとウィンクをしてきた。

えっ!?

レンの前に並んでいた榊が小声で叫ぶ。

「うわっ、赤井会長、いま僕にウィンクしてくれた！」

榊以外の生徒もざわめく。校内で赤井の人気はかなり高いようだ。

その声を聞いて、レンは途端に冷静になった。

今のウィンク、いったい誰に向かってしたんだろう……。

「アキラー」

レンはいつもの習慣で、放課後紅茶倶楽部が活動している温室にやってくる。とはいえ、今日はレンにとって一週間ぶりの部活動だ。

「レン、遅いじゃないか！ 先週も部活すっぽかして……何してたんだよ。お前がなかなか来ないから、おれが月夜野の餌食にされてたんだぞ！」

レンの姿を目にするやいなや、アキラがレンにまくし立てた。

部室では、いつものようにアキラ、コルカ、顧問の月夜野がいて、いつものようにアキラが騒いでいる。それはとても見慣れた、当たり前前の光景なのだけれど……。

「うーん……」

レンは、その場でしばらく考え込んだ。

「なんだよ、お前そういえば授業中もずっとぼんやりだったな」

「何か、何かがこのお茶会は違うんだ！」

「違うとは何がだ？」

月夜野が聞く。

「僕が求めていた世界って……こんな壊れかけた温室で落ちこぼれの生徒達とするお茶会じゃないと思うんだ！」

「落ちこぼれっておれのことかよ！」

早速アキラが反応して騒ぎ立てる。

「それに、生徒のお茶会に教師が混ざっているのもどうかと思う！ これじゃ、生徒が自由に語り合うなんてできないじゃないか!!」

「ど、どうしちゃったのレン君」

いま大きな声を出したレンに驚いて、コルカは思わず菓子を頬張るのをやめた。

「そうだぜレン、そんなのいまさらじゃないか？」

「僕、生徒会のお茶会……っというかサロンに誘われているんだよね」

訝しげなアキラに、レンはやや得意げな面持ちで言った。

「生徒会!?……そうか、この学校にも生徒会なんてあったのか」

「もう、アキラって本当に自分の興味のないことには無関心なんだから！」

「うるさいな」

「そんなわけで、僕、しばらくこっちのお茶会には来れなくなったから」

「え！」

突然のレンの宣言に、アキラとコルカは驚いて顔を見合わせた。

「でも、そのサロンって毎日じゃないんだろ、こっちは一応毎日やってるんだから、来れるだろ」

「うん、まあ、来ようと思ったら来れるけど……。でも、いろいろ生徒会のお手伝いもしなきゃいけないんだよねー。それに、彼らとお近づきになっておけば、あとでいろいろ有利になるでしょ？ こんなつぶれちゃうかもしれない部活に参加しているより良いと思うんだ」

「おい、月夜野、いいのかよ!？」

「まあ、仕方ないんじゃないか。本人がそう言うなら、俺は強制しない」

月夜野は平然と紅茶を飲んでいる。

「へっ、じゃあ、お、おれも……」

「アキラは、あのことをばらされてもいいならな。俺は止めないよ」

「くそー、ずるいぞ！」

「あ、もう時間だ、生徒会室に行かなきゃ。じゃあね、みんな。僕、もう行くから」

アキラは地団駄を踏むレンを気にもとめず、そう言って紅茶倶楽部の部室を出て行った。

生徒会室には、数人の生徒が集まっている。おそらくサロンのメンバーで、全員が揃いも揃って美少年だ。

まあ、でも僕が一番だけだね……。

レンが余裕の表情でメンバー見渡すと、その中には諸星の姿もあった。

「あ、卯月先輩！ 先輩もサロンのメンバーに選ばれてたんですね」

「ちょっと、なんで君がいるんだよ？」

思わず、レンは眉をひそめた。

「僕も中等部の1年の代表として選ばれたんですよ。良かった、卯月先輩も一緒に」

と、諸星は微笑む。

レンはおもしろくない。

(ちょっと、こっちはちっとも良くないんですけどー。まさか、この下級生も一緒だったとは……)

そこへ、赤井が少し遅れてやってきた。

「やあ、みんな集まったね。時間通りだ」

「あの……会長、今日は何をするんですか？」

集められた生徒の一人が聞く。

「そうだね、まずは自己紹介……といきたいんだけど、その前に、みんなにシュテルナーになってもらうための契約をしてほしいんだ。今日はそのために集まってもらったんだよ。紺野、あれを……」

「ああ」

紺野は、全員にA4サイズの紙を回す。レンもその紙を受け取った。

「うわっ、小さな文字がびっしり……これ全部読めって言うの……？」

紙面の上の膨大な文章量に驚き、レンは小さく口の中でつぶやいた。

「いろいろあってね、毎年文言を増やしているうちに、そんな量になってしまったんだ。でも、これはみんなを守るためなんだよ。シュテルナーになるということは、生徒だけでなく教師も一目置く存在になるということだからからね。君達の勉強を僕達が見てあげられることもできるし、将来、大学の学部だって自由に選べる。シュテルナーでいれば、学園生活を送るにあたって有利なことの方が多い。そのために君達を逆恨みする奴らもいる……。そんな奴らから君達を守るために、この書類が必要なのさ」

「ふーん、なるほどね……」

赤井の説明に納得したのか、サインをするレン。

「会長……」

「なんだい、諸星君」

「あの、この契約書、寮に戻ってからサインをしてもいいですか？」

「えっ!? 君、サインしないの？」

思わずレンが諸星に聞く。レンは、当然諸星も素直にサインしているものだろうと思っていた

諸星は小声で、レンにだけ聞こえるように囁く。

「兄さんがよく言ってるんです……。契約書は、その場でサインしないで家に帰ってきちんと内容確かめてからするようにつて。あとギャラは必ず先に聞いてメールで送ってもらうようにつて……」

「いや、ギャラって……」

「うちの兄さん、売れない絵描きなんです」

「諸星君は、心配性なんだね」

赤井は優しく言う。

「すみません……」

「いや、慎重なのはいいことだよ」

しまった……僕、サインしちゃったよ……。内容も確認せず、なんとなく雰囲気……って、これじゃまるでアキラじゃないか!?

そう思っているのが見透かされたのか、眼鏡の副会長紺野がレンの方を睨む。

赤井はレンの横にやってくると、レンが座っているソファの横に座り、彼の手を握り小声で言った。

「心配しないで、大丈夫だよ。これにサインをして悪いことなんて何一つない。それに、いざとなったら僕が君を守るから……」

「会長……」

あれ、赤井先輩、大人の男の人の香りがする……。

レンは、心と顔を上げて、不思議な気持ちで赤井の顔を見た。

赤井からは、独特な香りがした。そして、それはすぐに別な香りに変わった。

その時臼井がお茶を持って、準備室からやってきた。

「僕が選んだ茶葉なんだ。良かったらみんな飲んでくれたまえ」

赤井の言葉に、レンはカップを手を取った。

まあ、契約書って言ったって所詮学生の作ったものなんだし……いいよね。それに、この会長、月夜野先生なんかと違って裏表なさそうない人そうじゃないか。

会長はこちらに向かって朝礼の時と同じようにウィンクをする。

もしかして、もしかしてだけど……あの会長、僕を特別扱いしてる??

けれど、紅茶は前回と同じくとても渋かった。

「それじゃあ、シュテルナーになった諸君には、新しい名前を名乗ってもらうよ」

赤井はみんながサインし終わったのを見計らって言う。

「新しい名前って……」

「じゃあ君、諸星君から……」

「あの……でも……僕、まだサインを……」

「大丈夫、仇名みたいなものだからサインしなくても平気だよ」

「あ……はい……」

戸惑う諸星に、赤井は悪戯っぽく微笑みながら言う。

「そうだな、君には……片翼の天使とかどうだろう……」

「.....天使？」

「ああ、かわいらしい君にとっても似合うと思うよ」

「は、はい.....」

「あの、僕は……」

諸星に先を越されたことに内心焦りながら、レンは赤井に言った。

「どういふことだ。僕は特別扱いのはずなのに……」

「ああ、君かい。君は、“漆黒の墮天使”でどうだろう？」

「えっ、悪魔ですか!？」

「背徳感があってなかなかいいだろ？」

「は、はあ……」

なんで彼が天使で僕が悪魔なんだよ……

赤井は、その後も似たような名前を後輩に付けていった……

翌日、午後の授業が始まる直前、アキラやレン達のいる教室に生徒会長がやって来た。生徒達は、突然の赤井の訪問に驚き、ざわついた。

「やあ、諸君！」

会長は教卓のある壇上にあがり下級生達に向かって語りかけた。

「か、会長、何故うちのクラスに……」

榊が率先して話しかける。

「ああ、卯月君がいるのはこのクラスだろ。あ、いたいた……制服が違うからすぐにわかるよ」

赤井は、教卓から降りるとレンに近づく。

「くそー、卯月め……」

榊が悔しそうにつぶやく。

赤井はレンの目の前に立った。

「会長……」

「シュテルナーに選ばれたらね、この羽根をつけてもらわないとね」

会長自らレンの胸元に羽根をつける。

羽根か……ちょっといいかも。レンは、そう心の中で思った。

「あの会長の用事って……こいつに羽根を渡すためだけですか？」

榊は不服そうに赤井に言った。

「ああ、そうだよ。大事なことからね、学園にとってシュテルナーの存在は。君だってわかっているだろう？」

「そ、それはそうですけど……でも、コイツいつまでも前の学校の制服を着ていて、そんな奴がシュテルナーなんて僕は納得できません」

「君はそうやって、人の粗ばかり探しているのかい？　そういうのはどうかと思うよ」

「そうだよ、榊君、人の粗探しをする前に自分を磨かないと」

「くそー……」

レンに追い打ちをかけられて、悔しがる榊。

チャイムが鳴る。

「さて、僕も教室に戻らないと」

「やべやべ、授業に遅れるところだったぜ」

生徒会長が教室を出ようとするところへ、慌てた様子のアキラが入って来た。赤井は、鋭い目でアキラを睨む。

「あれ、高等部の学生がなんでここに……」

「アキラ！ この方は生徒会長様だよ!!」

レンが慌ててアキラに言う。

「あれ、レン、なんで白い羽根なんてつけてるんだ？ 白い羽根の募金なんてあったか？」

「募金じゃないよ!!」

「ほら、みんな、席につけ！ もう、授業はとっくに始まっているぞ！」

白衣を着た月夜野が教室に入って来た。

「ゲゲ、月夜野!？」

と口の中でつぶやくと、アキラはそそくさと自分の席についた。

月夜野は赤井に気づき彼のほうを見る。

「高等部の生徒が何故この教室にいる？」

「別に、もう、用はすみましたよ」

「そうか、じゃあ早く自分の教室に戻るんだな」

赤井は月夜野を軽く見やると、平然とした様子で教室を出て行った。

※

放課後、レンはシュテルナーのサロンが開かれる生徒会室に向かった。

サロンの時間にはまだ少し早い。しかし、生徒会室の前まで来ると、部屋の中から言い争っているような声が聞こえた。

「やれやれ、女の子みたいに泣かれてもね」

会長の声だ。

諸星が泣きながら部屋から出てくる。そこにレンとばったり出くわした。

「卯月先輩」

「諸星……」

一瞬視線が合う。諸星は眼に涙を浮かべていた。彼はレンに見られないようにさっと顔を隠すと、走ってどこかに行ってしまった。

「し、失礼します……」

レンは恐る恐る部屋の中に入る。

「やあ、君、いまの聞いていたのかい？」

赤井はレンに気づくとそう言った。

「えっ、あ、その、最後の方だけ……」

「みっともないところを見せてしまってすまないね。泣かれるなんて初めてだよ」

「あの……何かあったんですか？」

「……君、誰にも言わないって約束できるかい？」

「もちろんですよ、赤井会長！」

「二人きりの時は、リョウでいいよ」

赤井は、またレンの手を取る。

「リョウ先輩……その、諸星君は……」

「彼、僕に兄さんになってくれって言うんだよ」

「お兄さん??」

「ああ、そうしないとシュテルナーのサインはしないと……」

どうということだろう。意味がわからない。

「それで、会長はどうしたんですか？」

「リョウだよ。もちろん、僕は出来ないと言ったんだけど……」

「ですよね」

「でも……」

赤井は握っていたレンの手に力を込める。

「君みたいなかわいい後輩なら、僕の弟にしてもいいかな」

「リョ、リョウ先輩……」

赤井はレンに覆いかぶさるように体を近づけていき、もう少しでソファーに押し倒される……

。

……つづく。

Luno Teo ~生徒会編 #001~

<http://p.booklog.jp/book/58605>

著者 : Luno Teo

イラスト : 椿春雨

協力 : 七海鳴

<http://luno.noor.jp>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58605>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58605>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ